4　言語・文献・思想の融合する地平――インド学へのいざない――

一　インド・ヨーロッパ語族とインドアーリヤ語

ニューヨーク高層ビル破壊事件に引き続く米国の攻撃をきっかけに、アフガーニスターンについての報道に接する機会が増えた。カンダハール、ヘラート、カーブルなどの地名も馴染みとなった。テレビに映し出されたあの山岳地帯を中心に、アラル海へ懸けての土地こそ、実は、インド最古の文献『リグヴェーダ』やイランのゾロアスター教聖典『アヴェスタ』を専門にする者にとっては、心穏やかではいられない文献の故郷である。この地域は歴史時代を通じ、シルクロードの名が想起させるように中央アジアを経て中国へ至る経路であり、インド世界にとっても国際社会への出入り口をなす要地であった。

「インドアーリヤ人」が、現在のアフガーニスターンからカーブル（Kābul）峠を越えてインドの地に至るまでには、「インド・ヨーロッパ（印欧）語族」、さらにそれから分岐した「インド・イラン語派」としての前史があった。即ち、インドアーリヤ語は、イランの諸言語と並んで、ギリシャ語、ラテン語、ケルト諸語、ゲルマン諸語（英語、ドイツ語、北欧語など）、スラヴ諸語、アルメニア語、バルト諸語、死語となったヒッタイト語やトカラ語などと共通の起源から発している。これらの言語を歴史的に研究する分野は「インドヨーロッパ語（印欧語）比較言語学」とよばれ、音韻対応・音韻変化を軸に、今日までに、基になった言語（インドヨーロッパ祖語）をかなりの細部に至るまで再構成できる段階に達している。この祖語を話した人々がいつ頃どこにいたのかについての確証はないが、紀元前四千年期に、黒海からカスピ海へ懸けての北側に広がる草原地帯にあった三万人程度の規模の言語集団から発していると考えてよかろう。彼らはその後各地に拡散し、歴史時代には、ほぼ現在知られている地域に展開していたか、またはその途上にあった。

インドの「アーリヤ」人は、イランに入った「アリヤ」人との共通時代（インドイラン祖語時代）を経た後、紀元前二千年紀中頃にインダス河上流域（パンジャーブ「五河地方」）に入った。イランは正確には「イーラーン」で、「アリヤ人たちの（邦）」という語に由来する。偉大な宗教改革者ゾロアスター（ザラトゥシュトラ）が開いたマズダー教の聖典『アヴェスタ』の言語はイラン語東南方言に属し、ダリウスをはじめとするアケメネス朝の諸王の碑文は西南方言に属する一部族ペルシャ（パールサ）の言語で書かれている。紀元後に資料を残したバクトリア語、コワレズミー語、中央アジアの資料から知られるサカ族、ソグド族の言語は、東北方言に分類される。インドの古い文献は、アヴェスタや古ペルシャ語と研究上相補う関係にある。それらはさらに、インドヨーロッパ語族の言語文化の研究に基礎的資料を提供すると共に、そこから解明の手がかりを得ている。

インド内部での言語の展開について少し触れる。インドアーリヤ語の古い言語段階を「ヴェーダ語」とよぶ。この時代の文献は、精巧な工夫を駆使して祭官の家系に口頭で伝承された。この段階が終わった紀元前三八〇年頃、パーニニという学者が抽象度の高い精緻な文法規則を著した。これを基準とする言語段階を「古典サンスクリット」とよび、祭式付属文献群、哲学、文学、法律、科学、医学などの古典文献がその後連綿と著された。マハーバーラタ、ラーマーヤナなどの叙事詩は「叙事詩のサンスクリット」を用いて語られた。紀元前三世紀のアショーカ王碑文の言語、初期仏典やジャイナ教の言語（パーリ語、アルダマーガディーなど）は、古インドアーリヤ語から分かれて発展した「中期インドアーリヤ語」で、口語的要素を基礎に持つ。更に長い歴史を経て発展・分岐して成立したのが、ヒンディー、ウルドゥーをはじめとする「現代インドアーリヤ諸語」である。

アーリヤ人の進入以前に、インドの地にはインダス文明が栄えていた。紀元前二三〇〇年～一八〇〇年頃がその最盛期とされる。紀元前後からはドラヴィダ語・文化との融合も顕在化してくる。これらの文化とアーリヤ系の文化との影響・融合関係についての解明は今後の課題である。現在、南インドはタミル語を始めとするドラヴィダ語圏となっており、その他、ムンダー語、チベット・ビルマ系の言語などが用いられている。

二　『リグヴェーダ』の言語と思想

インドの地に入ったアーリヤ人が移住性（遊牧・掠奪を中心とし、季節的に農耕を行う生活形態）を弱め、定住化を強めてゆく中で、最初に編集されたのが讃歌集『リグヴェーダ』である。編集年代は紀元前一二〇〇年頃と考えられる。祭官職の家系に伝わった一〇一七讃歌、一万以上の詩節が現在に伝わる。往時の詩人たちが天理・宇宙秩序（リタ）の認識に基づいて「見た」それらの詩句には、真実・事実（サッテャ）にかなった正しいことば（の形）が持つ実現力（ブラフマン）が籠もっている。ことばがそのような力を持つためには、伝統に則ると同時に、その都度「見られた」新しい歌である必要があった。多用される語法に過去・現在といった「時」の表示機能をもたない動詞形があるが、リグヴェーダは、誇張して言えば、ホメーロスの叙事詩のような出来事を人に「報告」する「物語」ではなく、既に知っているはずのこと、真理や共通体験に「言及」する、歴史を越えた文学という性格をもつ。この讃歌の「原型」が成立したのはインド・イラン共通時代のことであり、現存するテクストに山岳地帯（ないしステップ地帯）での掠奪・遊牧中心の生活を反映する詩節、詩句、単語が多く見られるのはこのためである。現存する讃歌は、インダス河上流域で最終的な形を得た、つまり、後代の家系的職業祭官が本来の詩に擬して作った姿といえる。それらを取り囲んで、独自に作られた讃歌や詩節も存在する。

『リグヴェーダ』を伝承した祭官職を「ホートリ」というが、「（祭火の中に供物、殊にバターなど燃え上がるものを）注ぎ込み、献ずる人」を意味し、イランのザオタル（祭官・司祭）と同じ語である。祭式には、大別して、穀物や犠牲獣を用いるものと、ソーマという植物の茎の搾り液を用いるものとがあり、大きな祭式は更にこれらを組み合わせて構成される。『リグヴェーダ』が予定する古い祭式では後者の占める比重が大きい。ソーマ祭では讃歌に節をつけてサーマン（歌詠）が歌われる。ソーマは「搾り出す」を意味する動詞から作られた名詞で、精神を昂揚させる薬効のある植物、およびそのエキスの名であり、ゾロアスター教徒のハオマに対応する。『リグヴェーダ』の詩人はカヴィ「見者」と呼ばれ、他にリシ、ヴィップラ等の呼称があるが、「興奮に荒ぶれる」ないし「うち震える」が原義であり、昂揚した精神状態を得るためにソーマが用いられたと考えられる。ソーマが戦闘や掠奪行為に携わる場合にも人を奮い立たせたことはインドラ讃歌などに見るとおりである。因みに、より古くは蜜酒がその役割を果たしていた。

神々の背景には大別して二つの起源が想定される。第一のグループは「デーヴァ」である。この語は天（昼間見える輝く天空の覆い）を意味するディヤウ（＝ギリシャ語のズデウス、ゼウス、ラテン語のディウース）から作られた形容詞「天に属する」に由来し、ラテン語のデウスに等しい。昔からの「神々」であり、自然界の諸現象（太陽の諸相、暴風、雨、大地など）や英雄神を包摂する。火（アグニ）やソーマもこれに属する。第二のグループはアーディティヤ神群（アディティ「無拘束、自由」の息子たちの意、下記七参照）と総称され、「アスラたち」といわれる。こちらはインド・イラン段階で生じた新しい神々であり、社会制度の神格化である。それぞれ、王権、契約、部族慣習法、（家族間の財産・獲得物の）分配決定、（各個人の）取り分を神格化した、ヴァルゥナ、ミトラ、アリャマン、バガ、アンシャなどが属する。社会制度が神として表象されているのは、祭官階級がことば（文書）を管理していたためと考えられる。インドの人々は太古からのデーヴァたちに親近感を持ち、新しい制度神を畏れた。アスラの語は次項に見るブラーフマナの時代になると「神ならざる神、悪魔、魔神」の意味になっており、仏教文献の阿修羅へと連なる。イラン側では逆にデーヴァ（ダエーワ）が恐れられ、アスラの対応形アフラはゾロアスターの宗教改革によって、唯一神アフラ・マズダー「知恵なる主」となった。アスラ＝アフラ「主、首長」は元来ヴァルゥナの呼称であったろう。

三　「ブラーフマナ」文献

アーリヤ人がさらに東方へ進出して定住性を強める中で、目的・役割に応じ、また慣習や伝統に従って、多様であった各種の祭式・儀礼と、それらを職業的に担当するに至っていた様々な祭官家系群とは、次第に組織化されていった。その結果まず確立したのがシュラウタ祭式と呼ばれる祭式群である（意味は「学習・伝承に由来する」）。彼らが携えていた祭式用の詩句もこの枠組みの下に整理・編入された。シュラウタ祭式は人々を包んでいる「世界」や共同体、首長（王）などに関わる大規模な祭式である。祭式は個人の信仰・信心に関わる問題ではなく、宇宙の理法（リタ）を知っていること（「ヴェーダ」）に基づいて、言葉の力（ブラフマン）により自然界・人間界を操作する営みであり、「真に実在するもの、実現するもの」（サッテャ）とされた。ただし、祭式の効力を巡る議論の中には、祭式のメカニズムと祭官とに対する「信頼・信仰」が必須要素として現れる。「シュラッダー」がそれであり、ラテン語のクレードーと同語源で

「心臓を定め置くこと」を意味した。

実際に供物を取り扱う祭官（アドヴァリュ）が行作や使用する物に意義や効力を賦与すべく唱える短い文句（ヤジュス）は『ヤジュルヴェーダ』の中に編集された。この文献には、さらに散文部分が併せて編集されており、引き続いて成立した「ブラーフマナ」という名の文献群と共に、シュラウタ祭式をめぐる議論・根拠付けを内容とする。（両散文文献群を合わせて同じく「ブラーフマナ」と総称する。）これらの文献は紀元前八〇〇年前後にまで遡る。即ち、ギリシャのホメーロスの英雄叙事詩に先行し、特殊な記録類を除けば、純度の高いインドヨーロッパ語で書かれた散文最古の例であり、言語や文体研究の上でも、内容の面でも、重要な資料である。

祭官階級はこの時代までに、社会的地位を確立していた。『リグヴェーダ』の段階では、神々やその行為が力をもち、神々に語りかけ取引する能力のゆえに祭官が重要視されていたと思われるが、今や祭官の遂行する祭式そのものが世界を維持し、動かす位置にある。神々はいわば祭式の一構成要素に後退している。（もっとも我々は祭式専門家自身の残した文献以外に判断材料をもたない。）

「ブラーフマナ」の究極的課題は、祭式を構成する個々の手続きや詩句（マントラ）の使用が正しく遂行され、目的実現の力をもったものとなるよう、検証・確認することにある。そのための「論証」には神話的因縁譚（宇宙開闢とその中心となる神プラジャーパティ「子孫の主」の話、神々とアスラたちの戦いと神々の勝利した次第、事物の由来など）が引かれ、日常眼にする諸現象がそうあり、そう呼ばれる理由がこれに結合される。宇宙や現象界の諸事が正しく維持されているのは祭官の正しい働きのゆえであると明言されることもある。選択肢を挙げて根拠を論じることも多く、古今の権威・学匠の説や複数の神学者の討論・対決、他学派の説の否定などが見られる。ここにインドの思惟の最初の具体的表現がまとまった形で存在する。

「論理」の大きな特色として、二つの事物・事象の間に存在する共通点を抽象し、それを媒介項として両者を結びつける結合・同置の原理が挙げられる。これに基づいて祭式中の行作・事物が現象世界の事物・現象と同置され、祭官は

祭式という操作盤を操作することによって世界・万象を操る。この媒介項の発見をめぐる営為は、宇宙原理の追求へ向けられ、次項に述べる「ウパニシャッド」へと展開した。また、祭式においては、行作や詩句の意味・根拠を「知って」行うことが不可欠の要件とされた。意志の力は元来「クラトゥ」と呼ばれ、心臓にあるとされたが、単に知っているだけではなく、確信する者がもつ一種の念力が必要とされている。ブラーフマナ文献のこの性格は、「…と知っている者は…を得る」という帰結文の頻度の高まりとともに、ウパニシャッドの入り口となっている。

四　「ウパニシャッド」

次いで成立した「ウパニシャッド」では、祭式をめぐるテーマは背後に退き、広義の「哲学的議論」が前面に出る。議論の中心は現象界の背後にある原理の探求である。このような探求の結果、世界の最高原理はブラフマンの名に集約されてゆき、「ブラフマンは…である」という形式（アーデーシャ「断言命題」）において諸説が提出される。個々の存在物や個人の次元では、諸々の原理探求の試みがアートマン（「自己」）の名の下に集約されてゆく。大学匠ヤージュニャヴァルキャはアートマンを徹底した形で説き、ブラフマンとアートマンとを同置するに至る。このような営為の中で、死後の問題が主要な主題とされ、輪廻（サンサーラ、ただし、この語自体の初出は遅れる）や業（カルマン）という観念が検討されるようになっていた。「ウパニシャッド」の原義については諸説があるが、この語形が直接指し示す意味「ものの背後・根底に位置する・存するもの・こと」（ヒポスタシス）こそが上記の基本的性格に合致し、かつ、ブラーフマナ文献の思考原理の延長上に良く収まると考えられる。

「哲学」議論が前面に出てきた背景には社会の変化がある。アーリヤ人は、この間、さらに東漸を進め、定住生活を達成し、ガンジス河上・中流域を中心に都市国家が成立しつつあった。それまでの婆羅門（ブラーフマナ）階級の護持する文化は小規模な共同体の存在を前提としており、この性格は時代の下がるダルマ・スートラ（「法経」）、さらに後代のダルマ・シャーストラ（「法典」）などの「理念世界」にも当てはまる。ウパニシャッドの成立前後とこれに続く時代とは、村落共同体を越えた思想潮流が各方面に出現した特別な時代であり、仏教・ジャイナ教の両開祖や、既成の枠組みを越えた思想家・学者が婆羅門教文化の内外で求められた時代であった。都市を中心とした国家の成立に、有力な学

者と門下の者たちが知識人として求められたものと思われる。古いウパニシャッドに語られる神学的討論も、こうした時代環境を背景に脚色されたものであろう。

五　仏教興起とインド古典思想の展開

ヴェーダ時代の後期から、輪廻と業からの脱却（解脱）が時代精神の最重要課題となっていた。人は通常、死後天界に生まれ変わると考えられていた。その際、この世で良い行為をなせばその分だけ永く天界に留まることができ、次生でも良い生まれに生まれて再び良い行為を積むことができるとされた。しかし、次第に天界での「再死」への恐怖に焦点が移り、永遠に天界に留まる為の工夫が考えられ、解脱の思想へと繋がる。仏教は、言うまでもなく、この「不死」を求める課題に答えるべく成立したものである。ジャイナ教も同じ状況の中で成立した。以後のインド思想史は輪廻と業の解決、解脱を課題として展開し、その中から複数の哲学学派が成立した。また、多くの学問分野が派生した。インド思想では現世を苦と見、解脱を求めることに強調がおかれているが、その理由もこうした思想史的経緯に求められる。仏教の研究も、インド学という枠組みで捉えなおすべき時期に差し掛かっている。

六　インド学

「インド学」の中心は古インドアーリヤ語、中期インドアーリヤ語で書かれた原典を対象とした文献学にある。「文献学」とは文字資料に基づいて、そこから引き出せるあらゆる情報を探る学問といえよう。原典そのものは同じでも、写本、テキスト批判、伝承、文法・言語、歴史、事物、技術、生産、生活、制度、宗教、思想その他の解釈など、重点の置き方、光の当て方は様々である。他方、原典自身の正確な理解を追い求めるという基本は共通し、その為に可能な限りの方法を動員して検証する。インド学にとっては、「思想・文学・言葉・歴史、あるいは、社会の探求」といった垣根は二次的なものである。三千年以上に亘って連綿と多量の原典が著され、それらが今に遺されているインドは、一つ一つの原典に当たりながら理論を構築し、また、その理論をもう一度原典に照らし合わせて検証することが可能な、稀な領域である。

七　『リグヴェーダ』創造讃歌――人類と死の起源――

ここで、インド最古の文献が人間に普遍的な問題を扱っていることと、研究の現場とを知ってもらうための見本として、人間と死の発生に関する神話を紹介したい。『リグヴェーダ』第十巻第七二讃歌に見られる創造讃歌である。翻訳を挙げる。

一　神々の（諸々の）生れを、今、我々は公言したい、昂揚の中に（「うち震えることを伴って」）、
（以下に）言挙げされる讃辞の中に、ひとがもし、（この）後の代に見ることになるなら。
二　ブラフマンの主がこれらを鍛冶屋のように溶融（鍛造）した。
三　神々の原初の代に於いて、非存在から存在が生まれた。
神々の最初の代に於いて、非存在から存在が生まれた。
それに引き続き、（諸々の）領域が生まれた。その際、足（の裏）を上向きに広げた者から。
四　地が足（の裏）を上に広げた者から生まれたのだ。地から（諸々の）領域が生まれた。
アディティ（「無拘束」）からダクシャ（「能力」）が生まれた。ダクシャからは、また、アディティが。
五　アディティは実に生まれたのだ。ダクシャよ、おまえの娘として。
彼女に引き続き、神々が生まれた。幸をもたらし、不死を繋累にもつ［神々］が。
六　神々よ、おまえたちが、あの時、（原初の）海の上に、よく捕まり合いながら立っていた時、
その時、おまえたちの激しい埃（飛沫）が、踊る者たちの［それの］ように、飛び散っていた。
七　神々よ、おまえたちが、ヤティたちが［した］ように、諸世界を充満させた時、
その時には、おまえたちは、海の中に隠されてあった太陽を、運び出し了えていた。
八　アディティの、からだから生まれた息子たちは八人［であった］。
彼女は、七人とともに、神々のもとへと去った。［彼女は］マールターンダを捨てた。
九　七人の息子たちとともに、アディティは原初の代のもとへ去った。

子孫の為に（子孫を齎すべく）、他方また、死の為に（死を齎すべく）、彼女はマールターンダを連れ戻した。

第一詩節は主題の呈示である。第二詩節の「ブラフマンの主」は祭官詩人たちのことばの神格化であるから、「ことばによる創造」の観念がインドにもあったことを示している。同詩節の前半は、ことばの神に捧げられた別の創造讃歌の一節を前提としており、それに接ぎ木して本讃歌独自の解釈が述べられる。最初の主張「非存在から存在が生まれた」は後の文献でしばしば議論の対象となった。第三詩節は、この主張をそのまま受け、空間の発生を誕生説で述べているが、この讃歌は、一貫して、前の詩人が歌った歌の後半を繰り返してから自説を加える、という輪唱形式の構造をとっている。

第四節には「無拘束」→「能力」→「無拘束」という発生過程が呈示される。「神秘的循環発生」と称されるが、現実に「卵から鶏が、鶏から卵が」発生する過程と解釈すべきであろう。つまり、代を重ねて誕生が繰り返されて円環を成す。一度完結した円環は永遠の繰り返し・継続を保証する、という観念が背景となっている。有名な「プルシャの歌」には、男性原理（プルシャ）→女性原理（ヴィラージ）→男性原理（プルシャ）という発生過程がみられるが、ここでは、女性原理が主役である。神々の系列中では末子であるダクシャ「能力」が末子相続を反映する可能性と共に、アーリヤ系社会には本来無いとされる母系制の存在を示唆している。

讃歌は第八・九詩節で頂点を迎える。アディティはここでは女神の名である。彼女には「アディティの息子たち（アーディティヤ）」と呼ばれる七人の息子たちがおり、インドイラン共通時代に遡る社会制度の神格化であることは、上記二の最終段に述べた。ヴァルゥナからアンシャまで、一～五番目の序列は決まっており、六番目にその都度必要とされる神が入り、七番目の末子がダクシャ「能力」である。

讃歌の理解を困難にしていたのは「死んだ卵に由来する」と分析される語「マールターンダ」の解釈であった。サーヤナの注釈（紀元後一四世紀）に従って「鳥」と解されてきたこの語が人間の始祖を意味することを解明したのは、筆者が師事した印欧語学者カール・ホフマンであった。ブラーフマナ散文中に語られる複数の神話伝承が典拠となった。それに

よると、アディティが八番目に身ごもった胎児は二人分の体を持つ有能な存在であった。先に生まれていた神々は、彼に支配権を奪われることを恐れ、流産させる。その結果、上下左右ともに人の身長の大きさをもつ、未成形のものが生まれる。母神はこの子の存続を神々に懇願する。神々は、その死んでいた部分を切り離し、生きている部分を救う。「死んだ卵に由来する」この者は人間たちの祖先となった。ホフマンが解明したこの神話を問題の讃歌の解釈に援用すると、最終行「子孫をもたらすべく、他方また、死をもたらすべく、彼女はマールターンダを連れ戻した」の意味が明らかになる。人類の祖先は地上に生き返り、子孫を残してゆくが、同時に死を免れない。マールターンダが救われた時に切り捨てられたのは彼の死んだ部分であり、人は死と合一することによって元の完全な球体に戻るからである。死は人の本来の姿への回帰である。この讃歌は、このような神話を前提として、子孫によって生を維持する人類と、その個体の死の起源とを語り、世界、神々、そして人類の発生とその円環（原初の神々の世界への回帰）を見事に収めている。

神々も恐れる能力を持つ球体の存在、ということで想起されるのはプラトーンの対話編『饗宴』の中で、喜劇作家アリストパネースに仮託される恋愛の起源譚であろう。即ち、人間は本来、四手・四脚・二顔一頭（四耳）…の球体の姿をしており、体力優れ驕慢であったが、手を焼いたオリンポスの神々が二分割して今日の人の姿（主として男と女）と成した。恋愛とは、男女が本来の姿への回帰を求める営みである。インドにも同様の神話が知られていたことはウパニシャッドから裏付けられる。

この讃歌には、解かれるべき謎が未だ多く隠されているように思える。近代的インド文献学が成立して一五〇年以上、この間に多様な基礎研究が積み重ねられ、今日、我々はそれらの基盤に立ち、かつ諸成果を総合して研究できる段階に達している。今後の研究は、深い専門的研究が人類の普遍的理性の次元に直結する方向で為されていくことになろう。

［参考となる読み物］

・長尾雅人・服部正明編『原始仏典・バラモン教典』中央公論社、世界の名著1

・上村勝彦・宮元啓一編『インドの夢・インドの愛――サンスクリット・アンソロジー』春秋社
・辻直四郎『インド文明の曙 ――ヴェーダとウパニシャッド』岩波新書
・辻直四郎『リグヴェーダ讃歌』岩波文庫
・風間喜代三『ことばの生活誌』平凡社選書 113

（後藤敏文）

人文社会科学の新世紀
——東北大学文学部から世界へ——

© K.Hara 2003

2003年3月1日　第1刷発行　定価（本体1,800円＋税）

編　者／原　研二・鈴木 岩弓・金子 義明・沼崎 一郎
発行者／久道　茂
発行所／東北大学出版会
〒980-8577　仙台市青葉区片平2-1-1
TEL：022-214-2777
FAX：022-214-2778
http://www2.odn.ne.jp/~cdv18770/
E-mail：tup@par.odn.ne.jp
印　刷／東北大学生活協同組合
〒980-8577　仙台市青葉区片平2-1-1
TEL：022-262-8022

乱丁，落丁はおとりかえします。

ISBN4-925085-69-7 C0000